

第3回長野県生涯学習審議会 委員発言

日時：平成21年1月28日(月)13:30～15:55

場所：県庁議会棟3階 第1特別会議室

土井会長

9ページの「生涯を通じた学びと育ちの環境づくり」からご意見をいただきたい。

坂本委員

P T Aでも「学習」に重点を置いている。60年位前の祖父母の時代は「奉仕型P T A」、両親の時代のP T Aは「参加型P T A」、今私たちのP T Aは、「学習型P T A」ということで、多くの保護者と一緒に講演会や研修などで学習を重ねている。そうしていかないと、子どもたちのスピードの速さに親が追いついていかないことがあり、親も学習していかないといけないと感じている。あるP T Aの先輩に「成功することが大事なのではなくて、成長することが大事なんだよ」と言われた。親も子どもも成長していくということで、生涯学習はとても大事なことだと思う。私たちの仲間で話しているが、「生涯学習をしている人たちは年齢が九掛けだね」と言う。50歳の方は九掛けで45歳。「その中でも、特に心身の健康にかかわる生涯学習をしている人たちは、八掛けだね。がんばろうね」と生涯学習にみんながかかわっている。

水野委員

人生を振り返ったときに、生まれてよかったと思える人生を過ごせる環境がまわりにあつたらいいと思う。核家族を見ていると、夫婦で子どもを怒ってしまい、子どもが落ち込んでしまう。私は親子三代で生活しているが、親が叱っているときには絶対に口を出さない。後で陰に呼んで、「あんなことをやると、お父ちゃんもお母ちゃんも悲しいんだよ」といってケアしていく。そういう人間性豊かな子どもに育ってほしいと思う。おじいちゃん、おばあちゃんたちと一緒に住めるような環境ができてこないとなかなか思うようにいかないのではないかな。家族制度をもう一度真剣にみんなで考え直していく必要がある気がする。世代を継承していく一つのイベントだけの人生かもしれないが、今、還暦を過ぎると、何が一番うれしいかというと、「おじいちゃん」と言って孫が来たりするときはよかったなという気がする。孫にありったけの愛情を傾けることが生きがいになっている。

物質的に流されているが、質より情が大切で、生きていて良かったと思える教育が大事である。例えば、インドの子どもたちの目がなぜ輝いているか。チベットへ行っても子どもたちが生き生きとしている。なぜだろう。モノを与えられている日本の子どもたちに輝きのある目があるのか考えたときに、ちょっと違うかな。規則やいろんなことに

が感じがらめにされて、のびのびとしたところがあまり得られない。そうって社会は安全でない。家の中に閉じこもる。親も安心だということになって、なかなか外へ出てくれない。ここらあたりの社会の組織を含めてもう一度みんなで考える。人間らしく生きられる社会をつくるためにどうしたらいいか、そこが教育以前の原点、人間の生き方の原点はそこにあるのではないか。

小島委員

これはとても難しい問題だというのが、まずひとつ思ったこと。これは県で決めていくということは、これが市町村にありていって、市町村独自のものができていくということだと思うが、そのこのところの理解をまず求めるということが、最初ではないかと思う。やり方とか環境づくりといっても、なかなかすぐできるところとできないところがあったりするんで、やはり生涯を通じていろんな事を勉強していく場所があるよ、そういうことをしていくんだよ、ということ、まず県民の皆さんに知らせるっていうことが、とても大切ではないかと思っている。だから、具体的に何というのはちょっとわからないが、そんなふうに皆さんに浸透していくようにして、実質的なことはやっぱり市町村でないとできない部分がたくさんあると思うので、無責任のようだが、まず、生涯学習していくんだよということを皆さんにお知らせすることが最初かなと思った。

土井会長

県から出す方針ということの意味合いに、どのような影響力を持つもので、どこまでが影響が及ぶのか、市町村はどのようにやっていくのか、ということについて、まず押さえる必要があるというご指摘があった。

松村委員

県の答申を市町村で推進していくということですが、県の前に国の方針がまずあって、平成3年の中央教育審議会の答申では、やはり「新しい時代」というキーワードがあり、新しい時代に対応する教育の諸制度の改革ということの中で、「人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができる」という個々の学びのことが重要視されていた。平成20年の中教審の答申でも同じ、「新しい時代」というキーワードで出ているが、これは「参考資料1」にもあるが、「知の循環型社会」ということで、資料1に説明があったように基本的方向のところの、「学びの成果を人や地域に生かす生涯学習の推進」ということが、重要視されている。確かに基本的には個々の人々の学びが一番大事であり、根底にはあるけれども、それだけで終わらせずにこれからの「新しい時代」というのは、その学びの成果を活用するんだ、生かすんだ、ということがポイントになるのではないかと思っている。中教審の答申を受けて長野県ではどんな個々の学び

があって、それをどう地域に生かすのかということになる。そしてそれは、市町村ごとに違うと思う。都市の方たちにとってみれば、退職の方がいっぱいいらっしゃるかもしれないが、農山村にいけば、ずっと働いていらっしゃる方もいて、60歳は退職ではないという方もいらっしゃるの、それぞれの市町村で違うと思うけれども、まずは個人の学びから成果を生かすというところが、キーポイントかなと思っている。

それともうひとつ、実際今、どれくらい学びがあって、これから県の答申が出てどれくらいまで変わっていき、成果を生かすんだという目標が見えないとなかなか難しいかなと思う。例えば、平成元年に全国でITが導入されたが、今長野県で、ITを活用した学習等にかかわる方策というのが、どれくらい行われていて、さらにそれが学ぶだけでなく活用されているのかを調査する必要がある。私たちの青少年教育施設でも、今青少年の指導者事業がどれくらい実施されていて、本当に指導者として子どもたちや地域のために生かしてくれているのかを知るといことも、とても大事だと思っている。それはいつ、どこで知るのか、時期的なことを言うのはちょっと難しいが、こういうふうな活用の場が広がっていくだろうとか、ある程度の理想像を私たちの議論の中で示しておいて、次の答申が出た時に議論ができるようにしないといけないと思う。今現在のどのくらいなのかわからないと、どれくらい成果があったのか、生かしたかがわからない。今は個々の学びの場がたくさんあるが、学んだ人が指導者になっているとかいないとかいう状況を知ることが大事なのではないかと思う。

土井会長

今、県の答申というものと、それを受け入れる市町村というものについてご意見いただいているわけだが、この答申はまた企業で働いている方々にも影響を持つわけで、そういう観点から、小泉委員にご意見いただきたい。

小泉委員

会長の言われた内容に沿って答えられるかどうか別として、今日参加するについて、生涯学習ということに対してもう一度自分なりにおさらいして考えてみた。先ほど水野委員がおっしゃったように、ほぼ似たような考え方をもっている。生涯学習ということは、そもそも個々の人が、全ての人が自分の一生を豊かにするために学ぶことなのだろう。それは、今働いていらっしゃる方もあるいは退職された方も、あるいは学校に通っていらっしゃる方も、全ての人がそういう機会があるべきでないかなと思う。私は労働団体関係ですので、やはり今社会事情を反映している状況は極めて厳しい環境であろうかと思うが、すべて私どもが働くのは、物で豊かになるためだけではないと思っている。働くこと、あるいはするを通しながら、職場あるいはいろんな人と関わりをもちながら、人として心豊かになることだと思う。それは現在だけではなくて、一生を通じてそうでなければいけないのかなと思っている。まして、マスコミ等々を賑わしている、

親子における殺傷事件等々極めて凶悪な犯罪が多発しているわけで、思えば自分ももっとも若い頃は、そんなことはなかったような気がする。そんなことがあったら大変だったと思う。しかし、それが日常茶飯事のようにになると、いわゆる人としての感性が希薄になってきてしまって、一番大事な人と人とのつながり、そういったことがあながち忘れがちになってきているのではないかと。そして、私たちが働いているのが、企業であろうとどこで働いていようと、そこで働くと同時に、最後は必ず地域でお世話になって住むわけだから、地域の皆さんとともに歩まないといけない。でも、それぞれ違った環境にいた人たちが集まった時に何ができるのだろうか。その時になって急に考えても駄目なわけであり、生涯学習推進というのはすぐにそういう機会に触れることができる、また必要性を常にその機会、機会で気がつかせる、教える、これに行政が大きくかかわることが必要なのかなというふうに感じている。

塚田委員

私も重ねてのご質問に答えとすべきとすれば、ずれてしまうが、プライベートセクターのほうから言うと、9ページの一番下の若者や労働者が多くというところで、学びとか育ちの環境づくりとかいう意味では、まず形から入っていくことも必要だと思う。例えば、若者が人や地域とかかわってもらい、そういう機会を安易に与えないとなかなか難しいということになってくると、学生ならば、学校でそういう機会を得たことに対して単位を与えとか考えられる。もちろん、どうしてやるのか理解をして取り組むことは必要だが、それに対して単位を与えるというような形から入っていき、そこで地域と人との交わりの学びを勉強して、それが将来的にも生きてくるといような場をつくるのも必要ではないか。また、単位を与えることで、ある意味、人參をぶら下げるとい形になるが、ちょっと乱暴な議論でということなのだけれども、そういう形づくりも必要かなと思う。それから、労働者ということでは、企業とすればそういう場をどうやってつくったらいいのか非常に難しいことだが、逆に10ページの「学んだことを地域に還元する」ということでは、例えば企業とすればボランティア休暇を設定するとか、行政とは別に学校より企業、プライベートなセクターでもそういった場づくりをすることはたくさんあるのではないかと。そういうことを考えていかなければいけない。ひとつ環境づくりということは形から入っていくことも大切なのではないかと思う。

土井会長

非常に具体的な提案で、やはり生涯学習という言葉はわかっても、どうすることか、なかなか動けない。私もお店へ行って一回行くとスタンプを押してもらって、いっぱいになると何割か安くなるという、スタンプを押してもらうのが楽しみになる。長野県民が、生涯学習スタンプなんとかっていうのをもち、10回、公民館なり、青年の家なりに参加して、10回やった人には県から、あなたは生涯学習している人です、とい

うふうなメッセージが伝わるというのも形としてはあるかと思う。

続きまして、9ページの「生涯にわたって学ぶための基礎づくりとしての子どもや青少年期にとって、」というところで、専門学校の青年たちにかかわっておられ、前は地域の草刈りをしたことによって非常に地域の密接感を感じたという発言があったが、その青年たちに、今が生涯の基礎づくりをしているところなのだとということにかかわり、そういうことの意味がこの答申の中で伝わるにはどうするかということで、臼田委員。

臼田委員

20代前後の生徒を中心に依頼している専門学校・各種学校だが、やはり現在の子どもたちは自分以外の立場の人を受け入れる力がとても弱くなってきていて、自分の位置とか、自分の立場とか、自分の価値をなかなか見いだせないでいる子どもたちが大変多いと思う。やはり、親にも守られ、家族全員にも守られ、学校の先生にも守られ、地域にも守られていて、とても大事にされている中で、自分が社会に出て自分で働いて自分でお金を稼いで、そしてまた地域に貢献するということまでの、未来の展望をもって将来を見据えて生活しているかという、まだまだ将来まで見据えるきっかけは少ないような気がする。専門学校でもキャリア教育ということで、例えば社会に出てからのマナーとかそういうものについては指導させていただく部分ではあるが、先ほどもお話しいただいたように生徒たちにとって何が一番重要なのかということ、そういういろいろな世界の方とのかかわりとか、地域とのかかわりによって自分の価値を見いだしたりとか、自分の良さを見いだしたりということが非常に大きなところであるので、やはりこれは学校の中だけの学びということだけではなくて、生涯学習ということで外に出て社会の方と触れ合わせていただく機会がないと今後の若者の心の成長もなかなか見いだせないところがある。公民館のボランティアの活動に参加したりして、なにかできるところからやっていかないと子どもたちの本当の成長というのは見られないような状況なのではないか。ぜひ専門学校・各種学校でも、先ほど塚田委員がおっしゃったように単位とかの部分でも認定できるような活動ができて、また社会の方と会社の実際に働いている方のご意見を伺ったりするとか、そういう部分がもっとできていけばとてもいいのではないかなと、今いろんな委員の方のお話を聞いて思う。

土井会長

専門学校と公民館の連携という話もあったが、神津委員、いかが。

神津委員

大変素晴らしく要約されているまとめ方ではないかと思う。そういうなかで、学ぶ機会の充実の項目だが、公民館もどこもそうだと思うが、市民なり県民の皆様が生涯学習の機会を自由に選択して学ぶような方向、強制でなくて、学ぶ中でやっていくような

学習の機会をつくっていかねばいけないのではないのかと思っている。その中で、極論かもしれないが、学ぶことができるという環境が保障されるような生涯学習社会になるような方向にいけば、よろしいのではないかと思っている。ここの資料にも出てくるが、行政とか地域とか社会教育施設とかPTAとか、幅広く連携する中でやっていけば、前に進むのではないかという気がしている。

土井会長

学ぶ機会が多い方が良く、選択できることが良いということだが、これは行政の財政的な裏づけとも関係してくるが、「学ぶ機会を充実させる」ということについて、教育長さんあるいは次長さん、教育委員会、行政側ではこういう点については財政が非常に厳しい時代だと思うが、基本的にはどのようにお考えか。

事務局

今お話いただいたところは一番大事なところかと思う。その前に行政に対する考え方、これは最後の目次のところで役割分担の話に関連してくるので、今はそこまで申しあげないが、実は第1回審議会で小島委員から極めて行政の役割みたいところで貴重なご意見があったと受け止めている。小島委員が様々な活動をされている中で一番気になるのは、親が子育てをしていくにしても、本来親の責任というのはきちんとあるはずだと、おっしゃった。その中で地域や行政がいろいろやってくれている時代になってしまって、いろんなことに手を出してくださる。本来地域も含めて行政ももちろんだが、できないところをフォローしていくというか、補っていくのが行政なりの役割であったのだけれども、私が申しあげるのも大変憚るところだが、行政、我々県にしても市町村にしてももちろん国にしてもそうだが、非常に真摯にまじめに様々なことに対応しなければいけないという受け止め方を。もともと何か足りないとか、やらなければいけないという意識があるが、本来はやっぱりやるべきセクションがきちんとやって、そして我々が手助けしていく、こういうことも大事ではないかと思っている。そういう中で今のお話に関連すると、第1回目に県政世論調査の資料をお出ししてあるが、県や市町村は生涯学習を推進していくうえでどんなところに力を入れてほしいかという中で、一番多かったのは今ご議論を頂いている学習機会の提供をきちんとやってほしいということだった。2番目が学習情報。どんな所にどういう学習場所があってどんな所に行ったらどうい先生がいて、どういうことが学べるんだ、きちんといつでも誰が見てもわかるようにしてほしい、というようなことで、私どもが今やっているのは生涯学習推進センターでの情報提供事業や、広報、普及啓発事業であるとか、そういったものをやっている。この点については今後きちんと拡充をしたり強化をしたりしていかねばいけない。土井会長からのお話のように、財政状況はきわめて厳しい状況で、これはご承知のとおりだが、そういう中でもなんとかそういうところにきちんと力を入れていくべきだとい

うことには責任をもって感じている。

土井会長

以上、ひととおり、第3章、9ページにかかわってご意見をいただいた。次に移る前にまだ一言ご意見のある方はどうぞ。よろしいですか。それでは、次に10ページの第4章。学びの成果を人や地域に生かすための方策、ここが一番重要なところというご指摘もあった。どうするかという方策についてご意見をお願いしたい。右の下の方に4つゴシックになっているが、子育てに不安のある家庭や孤立しがちな家庭を地域でどう支援するかという体制づくりについて。この件について小島委員。

小島委員

子育てに不安のある家庭という言い方をしているのかちょっとわからないが、自分が不安を持っていなくても、子育てがわかっていない人はたくさんいて、いろんなお父さんやお母さん、若い人たちが見ていると、育てていく不安はそんなにないような気がする。育てていくために、もちろん金銭的ですか、そういう不安はあるだろうけれども。それが子どもたちにとってどうなのかなと思うと、私のように子育てしてきた者にとっては、「えっ、ちょっと待って。そんなふうに育ててしまったら子どもたちがどうなっちゃうの」というのがあって、子どもを育てる若い人たちが、不安もなく普通だと思っていることが私たちにとっては危ないのではないかということがたくさんある。できれば、子どもを育てるにはこういうふうな育て方もあるよというようなことを教える。何かそういうものがあったら、もっと自分たちも苦労しないで子どもたちをのびのびと育てられる環境になるのかなと思う。いまやっている母親学級とか両親学級とかあるが、ああいうところの内容をもうちょっと変えてほしいというのがあって、これはここに当てはまるかどうかかわからないけれども、何かそういう思いがある。子どもが小学校に入っている親が当たり前のようにしていることに、私たち経験者からしては、えっと思うことがあったりとか、もうちょっと大きくなると携帯電話も与えているが、その与え方についてもいいのかと思ったり。ただ親自体はそれに不安は感じてない。だけど世の中から見ると、「それはとても不安なことなんだよ」と言ってあげたいことがたくさんあって、そういうことが何とかならないかと感じている。ここの議題になるかわからないが、そんなことを今感じている。

坂本委員

P T Aの話になるが、先日関東ブロック大会があり、埼玉に行ってきた。そこで、「家庭で芽が出、学校で花が咲き、社会で実がなる」という、明治時代に埼玉の某校長先生が各家庭に配ったお手紙の言葉を、ご来賓の教育長さんだったと思うが、とても誇らしげに話して下さった。今、皆さんのお話を聞いていて、団塊の世代の方たちは、大きな

豊かな実を社会で実らせたと思う。それをぜひ地域に種としてまいてほしいと思った。その具体的な方策というのがなかなか難しいと思うが、子育てに不安をもっている家庭が多々ある。その中で、いろんな人たちにもまれて育つことが大事なのではないかと思う。ある講演会の先生のお話で、学校や家庭は子どもたちのためになることをしてくれると言われた。子どもたちを守ることを学校や家庭はしているけれど、地域のおじさん、おばさんの中には、そうじゃない人もいっぱいいる、様々な価値観に揉まれて育つことも、対人対応能力を養う上でとても大切だと言われた。家庭や学校だけでなく、いろんな方と接することによって子どもたちの対人対応能力が育つのではないか。さきほど臼田委員がおっしゃったように、子どもたちが社会の中でなかなか能力を発揮できないというところも、そういうところから改善されるのではないかと思う。さきほどボランティア休暇のお話をして下さったが、PTA休暇という休暇を設けていただければいいと思う。これもひとつの生涯学習だと思うし、これが生涯学習をするきっかけにもなるのではないかと思う。PTAの役員のみならず手がなかなかなくて、お仕事をされている方が仕事で休めないから役員になれませんという方がたくさんいるので、ぜひPTA休暇をお願いしたいと思う。

土井会長

具体的ないい方策が提案された。塚田委員、いかが。

塚田委員

PTAの役員を何度かやったことがあるが、やはり今、坂本委員が言われたように役員になりそうだとすると、どうしても仕事があってなれないという方がいっぱいいらっしゃる。今言われたことで、私はボランティア休暇ということは口には出したけれども、まさかPTA休暇というのは気がつかなかったけれど、それもこれから考えていかなければいけないことのひとつなのかなという感じがする。企業として地域でボランティア活動に何ができるかということは、一つには、先ほど言ったボランティア休暇というようなものを制度として設ける。

それから、例えばスポーツということではスポーツ選手を抱えることによってそのスポーツの普及発展に寄与するというようないろんな方策があるが、これもまた、乱暴なことを言うということになると思うけれども、企業として一番手っ取り早くできることはお金だと思う。先ほど長澤課長から財政的に云々というお話があったけれども、やはりいろんな活動をしていくにはお金がやっぱりかかると思う。企業とすればとてもこういう時代はそんなことはできない、スポーツ選手を抱えるなんてとてもできない、となってきてはいるが、今よりいい時代、経済的に余裕がある時代になってくれば、やはり企業とすればお金を出して、お金で支援するということが必要なのではないかと思う。教育をお金で語るなどは言うけれども、やはり教育にはお金がかかるというところはあ

と思うので、究極の支援ということではそれが必要なのかなと。そういうことを考えた場合、企業にとって一番大きな課題になってくるのは税制の問題だと思う。多分そういう形で支出したものは税務署とすると全部交際費に計上するようになると思うが、そうすると企業が交際費を計上するとそれと同額の税金を払っていかなければならない。例えばボランティア活動に100万円支出をしたとなると、同じ100万円の税金がかかってくる。結局経費として200万円必要になってくることがあるので、税制の見直しということが現実問題になってくる。企業として何ができるか考えたとき、やはりお金のことなんか考えると税制の問題もひとつ要望していきたい。

小泉委員

私の方は一切お金の話はできないわけですし、要求することはできるがそういう話にはできない。この項目でいったら方策というと、具体性はないかもしれないが、学んだ成果をどうするかといったら、私は環境づくり、土壌をつくっていくしかないと思う。自分で何かを学んだらそのことを地域に必ず生かしてもらう、あるいは職場かも地域かもしれないけれど、そういった土壌を、それぞれの環境の中でつくるしかないのかなと思う。例えば、職場においてもいろんなノウハウをもった人たちがいる。技術をもった方もいる。それでは、それを生かせる環境にあるかというとなかなかそういう環境づくりもできてない一面もあるが、そういう気持ちをもっていない。自分限りで終わってしまっている。それを何らかの形で地域に生かしていくという土壌をつくることは皆でやっていくことで一緒なのではないかと思う。

神津委員

この項目は育てるという感じで、先ほど子どもの話が出たわけだが、私もそのとおりだと思う。うちの方では、保育園や幼稚園に入る前の子どもを対象に、約130組来て年間を通してやっている。まず一番感じられるのは、この要点で1番にあたろうかと思われる「子育てに不安がある」とのことだが、お母さん方が何かあった時に誰か相談する人がいるのか。相談できるような方がいないような、言葉は悪いが、そういう親御さんが多く感じられた。この時代の核家族化で、おじいさん、おばあさんの家から出てしまい、若い夫婦になってしまうものだから、そこで相談すぐできないのかなという感じがする。また学級の中においてお母さん方同士が親しくなって、相談を自由に打ち明けられるような形になってきているものだから、そういう機会づくりはこれから積極的にやっていかなくてもいけないという気がする。もう一つは、核家族は社会の流れでしょうがないが、そうなった場合、家庭とはなんぞや、いま若い夫婦が住んでいるだけが家庭なのか、またはその別にいるおじいさんおばあさん方も当然家庭だと思うが、家庭の定義、原則をどうやって理解してもらうか、心配が増えてくると思う。家庭、または家族という基本的な、字で書けばそれだけで答えは出てしまうが、もう少し幅広くやって

いく中で家族、家庭はこういうものですよ、幅広くやっていますよ、というようなかたち、なにかお知らせするようなかたちでやっていくのもひとつの助け合いになるのではないかとい気がした。

土井会長

家庭教育への啓発の重要性ということについて、やはり我々の居場所は家庭にあり、ただいまと言って帰るところは、誰もがみんな「お母さん、ただいま」と言って帰っていく。その家庭に安らぎがなかったら、どんなに物が豊かになったとしても、むなしさを感じてしまう。その家庭と学校と地域社会、これらの教育全体をひっくるめたのが生涯学習、こういうふうに捉えようというふうになっている。この生涯学習枠組み全体の視点から、松村委員。

松村委員

枠組み全体の視点で答えられるかどうかかわからないが、第4章の「学びの成果を人や地域に生かすための方策」の「学校との連携」と、「地域の連携」ということは、言葉で言うのも、文字にするのも簡単だが、実行するのは本当に難しいと常日頃感じている。なかなか、社会教育や生涯学習の観点から学校にアプローチしても学校に届きにくいということを感じている。先ほど、PTA休暇があるといいなという声があったのを聞きして、お願い事もできるのだなあと思ったので、「学校連携」に関しては、全国で既にやっている所があるかもしれないが、長野県の小中高の教育の中の、校務分掌の中で「地域連携担当」をつくっていただくと良いのかなと思っている。なぜかという、大体学校では、教頭先生が涉外窓口になっていることが多いのだが、実際に担任をしている先生方とか、地域に子どもたちが職場体験に行く学年の先生方が、地域に出て行けるような、「地域連携担当」という分掌があると、私たちもその方に対してアプローチができるかなと感じる。学社融合や学社連携といわれているが、担当がはっきりしていないとなかなか難しいと感じている。

二つめの「地域の連携」に関しては、これも常日頃悩んでいるところだが、本当に有機的な連携が難しい。私の職場では、3年で異動の職員が多いので、なかなか地域に根づけなく申し訳ないと思っている。毎日の仕事に追われていて、自分たちの地域の社会教育施設や市町村の事業と全部連携をとってやっているかといったらなかなか難しい状況となっている。先日も公民館の方たちと集まる機会があり、1年間の事業を見せていただいたところ、一緒にやれること、組めることがたくさんあった。もっと早く連携をとっていればよかったなと気づいたところ。その他にも同じような内容の事業を町の図書館がやっていたり、市の生涯学習課がやっていたり、私たちの施設もやっていたと気づいた。もう少し連携がうまくいけば、予算も人も事業ももっとよいものになるのだろう。どうやったらいいかということは教えていただきたいことがいっぱいある。この

「地域の連携」というのは、連携をとっていくのに、なにかネットワークづくりになるための手立てがあるといいのかなと思ったので後ろの資料のところに入れていただければと思う。

土井会長

学校に地域連携担当という部署があればいいと社会教育の具体的なご提案があった。

臼田委員

地域連携担当はいかがということだが、私も生涯学習審議委員をさせていただくことになってからいろいろ考えているなかで、そういう担当者がいた方がやはり話も進みやすいし、いろいろな活動ができるのではないかなと思う。いま学校では目先の生徒指導や専門学校で検定取得とか、そういうものについて追われているので、さっきも申したとおり、家庭とか自分の生きる力とかそういうものも感じて成長していかないと偏った人間形成になってしまうと思うので、学校で単位であれば一番良いかなと思った。やはり地域の連携で、例えば学校では何ができるのだろうと考えてみると、さきほど塚田委員がお話いただいたところでは、お金の支援が企業さんではできるところがあると、では学校では何ができるかといったら、生徒は若いですからフットワークは軽いので、使える力は使って動けるところは動いて、そういう部分から地域のいろいろな活動に参加していけるような状況ができればいい。その結びつきというのが、松村委員にお話いただいたように、どういう連携をしていくかが一番難しいところなので、担当者がいて両方向の話が具体的に進んでいけばまた活路を見いだしていけるのではないかな。

土井会長

神津委員、公民館に学校連携担当というのを置くというのはいかがか。

神津委員

大変すばらしいご意見かなと思う。ただ、改めて学校連携担当と置かなくても、お互いに連携をとれば職員が複数いて、分野ごとに担当を決めてやっているが、いつでもお互いに話ができる機会があり、佐久の公民館の場合、改めて人を増やしてどうのこうのというのは非常に難しい状況であるので、お互いに悩み事があれば連携をとりながらやってまいりたいという考え方である。

土井会長

小中と連携して、実際にやっているわけか。

神津委員

今はやっている。一度発表させていただいたが、短詩型文学祭の関係を相当積極的にやったり、地元の校長先生方と連携をとりながらやったりしている。ただ、これからも幅広く、まだ物足りないと思うのでやらなくてはいけないと思う。

土井会長

公民館の側からはむしろ学校に地域連携担当を置いてもらった方が連携しやすいと。

神津委員

相手のせいにするわけではないが、少なくとも公民館に専門職員がいるので、学校に担当が置いていただければ、難しいと思うが。佐久の校長先生方に話をすると、相当積極的にやりますよと乗ってきて、すばらしいと思っている。その結果の一つだが、去年一回やりました俳文の関係、短歌の関係がすごくて、それぞれ作ったものを出してもらい一句冊子にするわけだが、今年の場合にも去年の3倍から4倍以上の件数が増えているわけで、これはぜひ将来的にもやっていきたいし、学校側の協力をいただいている。

土井会長

坂本委員、さきほどはPTA休暇という斬新なご提案があったが、いま松村委員が、学校教育と社会教育の連携というのは言うのは易くとても難しい、学校側に地域連携の担当があればどうですかという話だった。PTA側に地域連携担当という委員を置くということはどういうものか。PTAというのは単PTAがあって、市P連があって県P連があって、それから関プロがあってというふうにPTAだけで完結している、目が向いているところはそこだけという感じがするが、その中で学ぶという、足元の、地域の、学校の、そこにある地域の公民館と連携するという点はいかがなものか。

坂本委員

PTAでも、今年は家庭、学校、地域の連携ということに重きを置いていて、県Pから郡P、郡Pから単P、単Pから各学級PTA、学級PTAから各家庭、各家庭から地域へ、みたいな流れをスムーズに、スピーディーにというところを目指している。学校も先生方は、今はもう地域と関わってもらわないと学校が成り立たないとおっしゃっていて、PTAというよりもPTCAという言葉が広く使われているようだ。

Cというのは、コミュニティー。親と先生と地域のコミュニティー、連携ということで、学校も家庭もなかなか単独では難しいということで進んでいるようだ。

塚田委員

私も詳しくはわからないが、小学校のPTAに関ったときに、PTAの中に各育成会が関わっていて、その育成会が公民館とかなり深い関係があったように思うが、そういう

ものの利用を、昔からあるのでそういうものの活用をもっと進めることができるのではないか。

小島委員

育成会のお話があったが、育成会がなくなっていくという方向が今随分出てきている。いろいろな理由からだと思うが、長野県下でも育成会なくなっているところがある。

土井会長

それは、放課後子どもプランとの関連か。この辺の状況はいかがか。放課後子どもプランと育成会の関係。

事務局

放課後子どもプランと育成会の関わりをちょっと承知していないが、放課後子どもプランそのものは、学校の学習が終わった後の安全な子どもの居場所づくりという大きな観点がある。これは全国的にもさまざまな悲惨な事件が発生して、それに対する対応等も含めて広い意味での下校後の学習活動づくりという観点だが、安全な居場所づくりという大きな目的がある。それに加えて、放課後子どもプランは子どもたちの学習のさまざまな習慣づくりという大きな意味もあるのではないかと考えている。いくつかの現場を拝見させていただいた。授業が終わって下校してくる。そして放課後子どもプランを実施している空き教室に行くと、小学生、特に低学年の子どもたちが最初に宿題をやっている。おそらくそういう機会がなくて家庭に帰ってしまうと、宿題を全然やらず、好きなテレビゲームをやったり、テレビを見たりとかいうことが多いのかもしれないが、指導者の方たちが、まずここに来たら宿題をやりましょう、宿題を全部終わらせなくてもいいよと言っている。極端に言えば1ページだけやってもいいし、もっと極端に言えば一問だけでもいいから、算数の一つの問題をやってもいいから、それが終わったらいろんな遊びとかスポーツとか、体育館に行って遊びましょうというようなことやっていた。放課後子どもプランで一番大事なところは本来の目的は安全な子どもの居場所づくりかもしれないけれども、習慣づけなどの意義が非常に大きいのではないかと考えて帰ってきた。

ただその育成会の数の現状が県下どのように推移しているのかちょっとわからないので、もし次回までに確認ができればご報告させていただきたい。

土井会長

放課後子どもプランというのは文部科学省と厚生労働省が連携して取り組む。

最後になるが、水野委員、教育問題の本質的なご指摘を毎回いただくが、今回のこの第4章に関るところでご意見をお願いしたい。

水野委員

地域をこよなく愛し、郷土をこよなく愛している人間は当町で私が一番だと思っている。子どもの頃、雪の降る日に、ろくな靴下も履かず短靴を履いていると、靴の中に雪が入ってガボガボしながら、水が温かくなって外にはね出すような格好をして歩いていた時に、「ぼく、かわいそうだね」と言っておばさんが和服を着てきれいに着飾っているにもかかわらず、僕にマフラーを貸してくれた。そのマフラーの温もりは今でも忘れないし、そうして地域に僕は大事にされた。ですから地域を捨てることは絶対できない。まして、両親もそこで死を迎えているわけだから。

教育という中で、皆さんがどうしても執拗に言うことがどうしても理解できない。僕のところ、湯川秀紀の残した教室を出た、国公立の大学を二つも出た人がいた。その人は学校の先生をやっている、何かの理由で5人の子どもがだんだん処分をされてしまった。「僕がいるために子どもたちを不幸にしてしまう、僕の力なさがこういう子どもを生んでしまって」と責任を感じて先生を辞めてしまった。僕にしたらずごい先生だと思うのだが、それで心を病んでいる時に僕のところに来た。見て、体力的にも心も病んでいてこれはいけないから、土木の現場へ出して使った。その時、力のない蚊トンプという名前だったが、いつ羽がとれてしまうか、足がとれてしまうかわからないような人だが、それを助けていたのは今で言ったら特別支援学級出身の人だった。隠れていて、彼が重い物をやっている時には僕に見えないようにして手伝っている、ずっと助けている。「へえ、すごいよな。」その人は僕の先輩でもあったので、「先輩、先輩」と呼び、彼は会社では先輩ということになってくると、責任感がはっきりしてきてニコニコして会社に来るようになったということがあった。

良いことか悪いことか理解できないところがある。例えば中国からきた子ども、障害のある子どもたちが施設にかたまっている。昔は小社会がその人たちが荷物を運んだり、重い仕事を手伝ったりしてお小遣いをいただいた。そういう子どもたちが初めから社会に出されてしまったが、そういう人たちがいろいろなことをした。雪の中の話だが、雪がたくさん降ってきて、精米物のお米や粉を引いて坂道を上がっていこうとするが、上がれなくなってしまう。一生懸命押していたらやっぱり友達が後ろを押すようになった。そうやってその社会が構成できている。それはただ一つのことだが、今でもそうだ。

うちの女房が年末になると隣近所の非農家の方や他所の家へ、頼まれもしていないのに漬物とかを持っていくが、反対に何処どこへ行ってきたからお土産を持ってきるとか、そういう繋がりがうんと濃くなっている。僕の具合が悪かったら、友達のお医者さんが点滴を持って家へとんで来る。そのような関わり合いをもって、お互いの力を出し合う。

生まれてから個で生きているというような教育があるような気がして仕方がない。個の力をつけてなんになるか考えてみたら、歌舞伎も観ている、クラシックも聴く、何も見る、すべては観て終わって、何それ、と。社会のためになったのか、そういうことを

することによって幸せになるのだったらいいが、物事を閉ざされて、社会性ももたず公民館活動も地域社会との連携ももたずにいる人も結構いる。しかもそんなところへ生涯学習はいらない。不必要だと思う。それよりも、障害をもった人がやったことなどを考えている方がよっぽど立派なことだと思う。

子どもが生まれた時から自然の豊かさだとかを教えたい。僕も自然の見方を知らなかったが、東京から来た人が横にいて「今日はアルプスが霞んでいるけど、あの裾野がきれいだ。」と毎日言われる。「川野がきれいだ。白鷺がいた。すげえな。」毎日言われると物の見方が変わってきてしまう。その人に教育されて、朝4時ごろ起きて、春先まだ寒い風が吹いている時にオオイヌノフグリがちらちらと揺れているのを見て、知らず知らずに笑って頬が痛くなる。そういう感動の仕方を教えてもらっている。

みんなが忘れてのことだが、絶対人間教育でなくてはならない。キリストがなぜ十字架についたか考えてみてほしい。生きていくものすべてのものの身代わりになって、思いやって十字架についたと僕は思っている。般若心経の中に色即是空、心と物のバランスのこともうたわれている。そういうのを考えてもどうなのか。組織立って知識量を増やす必要があるか、それよりももっと心の温もりだとかを訴える教育、子どものうちにもっとそれを教えて、例えば、隣のおばあちゃんが作ってくれた瓜を「おばあちゃんのかきゅうりは、いつもおいしいね。」と言葉に出して感動の仕方を教える方がよっぽど大事ではないかと思う。

土井会長

11ページ第5章に移りたい。

学びや活動を推進する関係機関・団体等の役割ということで、ここに6点、順番に並べてある。この中で、1番目が家庭での取り組み、2番がPTA、3番がボランティア、4番目が地域活動、町内会など、さきほどの育成会のことでも地域活動、5番目が行政への期待、そして6番目がシステムの構築、特に生涯学習を推進する上で行政へ、どのようなことをこの審議会としてはお願いすることを盛り込める必要があるかどうか、これらのことについてご意見をいただきたい。

小泉委員

難しい課題。行政への期待という部分への切り出しだと思うが、実際に財政的な部分を抜きにしてどんなことがお願いできるかといえ、やっぱり行政機関ができることというのは広く学ぶ機会があるのだということをいろんな広報等通じながら広く県民に知らしめることが、行政がやるべきことなのだろうと思う。少し整理できないので、後で発言できればする。

白田委員

私たちの学校群は、専修学校・各種学校という学校という名前がついているが、小学校や中学校、高校、大学などの学校とはちょっと別格な学校群になっている。行政からの援助とかは少ない学校群となっている。それは専門学校・各種学校でも話になっているところだが、一条項というのがあり、そこに載ってない学校群が専門学校・各種学校で、そういうところで例えば地震が起きた時にその補助がもらえない学校群。そうではあるが、社会のなかでの教育の一翼を担っている部分ではある。そういう学校群であるので、例えば、ここまでの広報のところ、小学校や中学校の学校開放というのは地域の広報には載っていくけれども、専修学校・各種学校だとそういう広報には載らないでいる。それはこちらの方で働きかけをしていない部分なのでなんともいえないところではあるが、そういうところに載せてもらえるような学校群であるかどうかというのは私たちの学校群の心配なところである。そういうところが分け隔てなく、生涯学習の中で手伝わさせていただけるところは、こちらの学校群としてもお手伝いをさせていただくなり、ボランティアをさせていただくなり、させていただける機会がもっといただければいいかなと今思っている。

神津委員

行政への期待の項目ですが、期待は必要に大きく思っているわけで、ぜひお願いしたいが、まずひとつはソフト面であろうかと思う。今悩んでいるというか、何かにつけても講師の先生を頼むについて、前もって相当お金がかかる。程度安い、無料でやっていただける方を積極的に使っているが、県の方でちょうど学習センターの情報をいただき、それを活用させてもらっているが、それも今充実しているけれど、更に充実していただいて、講師の先生等々についても安いお金で講演できればいいかなというのが1点。

いま1点。お金については公民館ではボランティアでやりなさいという意見が当然相あるかと思うが、現実にはボランティアだけでは公民館活動はできない。ある程度の予算がないことには全体的には公民館活動ができないというのが現実である。現状とすれば、いま市からお金をもらっているが、地域の公民館が多くあり、年間700万円超くらい出ていて、地域で分配してやっている。その中で地域の皆さんが頑張っている、それはそれでよろしいが、何か新たにやる場合についてはなるべく安くやっているけれど、現実にはボランティアだけでは運営はできないのが現状であり、そのところは行政の方に、私どもとしてはまずは市にお願いして予算をとるようなかたちでやっているところ。ぜひこれは県においても公民館活動は市町村の仕事だということではなく、金銭面からも多少なり幅広い補助制度なりいただければありがたい気がする。

土井会長

信州大学では8学部の教員が出前講座というのをやっていて、無料でいくつかやっているの、またホームページなどを見ていただければと思う。

小島委員

学びや活動を推進するというのはとても難しいことだと、まず思ってしまう。細かいことを言えば、公民館などでもいろいろな活動をしている。子どもたちを集めて地域の行事を教えたりとか、みんなで楽しく過ごすことをやったりするが、そこに参加する子どもが少ないというのが現状。それは小学校や中学校の子どもの意思よりも親の態度というか、こういうことやっているんだから行って来い、と言われれば子どもだって行くわけで、行けば友達ができたり、皆でわいわいしたり、とても楽しいと思う。そういうことを公民館でもやっているし、学校や地域の育成会とかPTAの方とかも行事やっているのに、なかなかそこに参加する子どもがいないというのが、いま見ていて思うことなのだけれども、子どもが参加して、もっと今やっている行事だけでも充実しようという何か良いアイデアがあったらとてもいいのではないかと思う。どこが何をすればいいのだというところがとても難しいところだけれども、ひとつのところでやるのではなく、みんなでやっていかなくてもいけないのではないかと思って、先ほどから出ている、いろいろなことの連携というのが大事だなと思った。

連携するということをやったり情報提供してもらわないとできないということもあるので、本当に県の皆さんは大変だと思うが、いろいろなところで情報の提供をしていただければと思う。いま、会長もホームページを見てくださいとおっしゃったが、世の中ホームページを見られる人ばかりではないで、そこら辺のフォローもしていただければありがたいと思う。

坂本委員

ホームページを見られないということ、やはりたくさん私の周りにもいる。だけど、そのホームページを見るのを学習してもらうように仕向けるのも生涯学習のひとつではないかと思う。

先ほど小島委員が昔の子育てと今の子育てが違うということをおっしゃってくださったけれど、今の若いお母さんの中には言われないとわからない人がたくさんいるので、小島委員がもっていらっしゃるようなご意見が若い世代に伝わるような、若い世代との交流の場をつくってもらえるとありがたいと思う。

先ほどの、学校に地域連携係があればいいというお話だが、例えば放課後子どもプランのところに団塊の世代の方たちが入っている指導するということは無理なのか。もし、可能でしたら学校の連携係と地域の方々の橋渡しをしていただければ子どもたちにとってもとてもありがたいと思う。

先日、高校生と関っていて、折り紙をやろうとって折り紙がなかったので、このような長方形の紙を正方形にしましょうと言ったら、真四角にできない。「どうするの、この子たち」と私はとても心配になった。年代の違う方たちとの文化の伝承をされてい

ないのかなと思った。あと、歌に関しても当然知っているだろうと思う日本の歌を知らなかったりする。それで小島委員のような方々が地域にたくさんいてくださればうれしいなと思う。児童館には小学校の子どもたちしか行っていないし、子育て支援センターには小さい保育園に上がる前の子どもたちしか行っていない。私は子どもを育てていた時に、保育園に入る前の子どもたちが小学生、中学生、自分たちよりも年上の子どもたちと一緒に遊んでもらう時にとっても目を輝かせて喜んで遊んでいたのを思い出した。親ではできないことが異年齢の関係の中でできるのではないかと思う。児童館は児童館、子育て支援センターは子育て支援センターで分けなければいけないのかもしれないけれど、そこをなんとかうまく連携とってもらえれば、将来の子どもたちのためにも、地域のためにもいいのではないかと思う。

土井会長

放課後子どもプランと高齢者との連携の話が出たので、具体的な事例を一つ紹介させていただきたい。長野市大岡地区の農村女性ネットワークの12名の女性たちと3年前から私どもの学生が連携してきているが、3年たって、つい先週、新たな活動が発足した。連携する団体は、放課後プラン「わらわらくらぶ」、大岡小学校 - 校長先生は以前文化財・生涯学習課におられた小岩井彰先生 -、農村女性ネットワーク、それに信大の「YOU遊世間(ゆうゆうワールド)」の学生、この四者が連携して、通年にわたって、「信州大岡農業体験塾」という活動を立ち上げた。ここで、農村女性ネットワークのおばあさんたちは、セリ摘みツアー、竹の子取りツアー、やしょうま作り、こんにゃく作りなど、農産物加工等を子どもに教える、そのために学生が支援に入る。学校は休耕田がいっぱいあるので、全校で総合的な学習の時間に大岡産の大根をいっぱい作って少しでもお金を得られるようにしたいというので、その時に必要に応じて学生がかかわる。放課後わらわらクラブとは10月4日から一週間、老人センターを使って通学合宿をする。通学合宿というのは、学校が終わって放課後プランが終わって、家に帰るのではなくて老人センターに行って、そこで学生と一緒にやる。学生たちが晩御飯を作って彼らを待つ。一緒に風呂に入って一緒に過ごして、そして朝ごはんを食べさせて学校へ送り出す。学生たちも子どもを送り出してから大学の授業に行く。こういうのを一週間やる。これはすでに青木村で小岩井前教育長がやられたことで、それを再び大岡村でもやろうということで計画している。放課後子どもプランに来ている4人のコーディネーターの方や手伝いの方は村人ではなくて、全員Iターンの方です。その中のひとり、植野翔(ウエノカケル)さんで、早稲田大学の理工学部並びに大学院の建築科を卒業して、都市計画を学んでこられた。都市計画というと、ビルディングを造るのかと思ったら、農村地域の景観をつくるのも都市計画ということで、そういうことを研究してきた。大岡へ2年前に移り住んで近々結婚する予定で、「私はここで百姓をやります。」と言い、遊休農地を借りて米作りをやっている。そういう方々が学生と一緒にやることによって

のすごい刺激を得る。そして村の51人しかいない村の子どもたちにおばあちゃんたちが入る、四世代が一緒になってやっていくということを開始した。

去年の11月にスタートしたのは「信大茂菅農業義塾」。不登校のお子さんたち、本当に困っている。長野市内だけでも700名のお子さん、長野県下で2700名の将来前途有望なお子さんたちが家に閉じこもったままになっている。なんとかできないかということで、長野市内に八つの中間教室を学生が回って声をかけて、自然に癒されたいということで、あなた方に好きな畑の一人一畝をあげるからいらっしゃいと言ったら、21人来た。その農業を誰が指導するかというと、JA並びに長野市農業公社の専門家、並びに長野市茂菅の80代の農家先生。こういう方々の中で大地とのかかわりの中で、いわば、風土で癒されていく学び方して、少しでも成果が上がればいいと思っている。

行政とのかかわりということと言うと、生涯学習という「学習」という名前がつくから、これは教育委員会の担当部署だという考え方ではなくて、生涯学習を通して学んでも、例えば、今度はもう少し土地がほしいとなれば、農業公社に頼まないと土地の斡旋はしてもらえない。あるいは、地域の学びをしたということで地域づくりのマップを作る。この地図をどう生かすか、都会から来た人の観光地図として活用したい。そうすると商工観光課と連携していかなければならない。あるいはスポーツ活動をやった。うんと健康が増進した。そうすると自分が学ぶだけでなく、地域の人たちも一緒に体育活動をしよう。そうなったら、保健課とかとも連携しなければならない。教育委員会がすべてをやるのが生涯学習だという発想をやめて、生涯学習だから経済課とも農政課とも保健課などあらゆるところと連携して、村づくり・まちづくり、県民づくりをやる。こういう視点から、縄張り意識をはずして、生涯学習だからすべての局と連携するということが必要だと思う。

去年の暮れ、「須坂農業小学校」へ餅つきに行ったら、三木市長から直接お聞きしたのだが、市長は実際に行政をされている中で、教育委員会担当のスポーツ部門があるけれども、ここで身につけた力が生かすには、結局これは健康面で生かすしかない、それが一番良いというふうに考えられて、教育委員会の行政、スポーツに関する部分を市長部局へもって行って教育委員会から外そう、こういう提案を市議会でされたそう。いくつかの政党は社会教育法がどうのこうだということで、反対でまだ実現はされていないけれども、すでに先駆的な取り組みはもう行われているのだな、これからの生涯学習はそういう方向に行かなければならない。

『生涯学習体系論』を書かれた真野宮雄先生 - 私の学生時代の担任してくれた先生で教育制度の専門家だが -、この先生が生涯学習ということが始まったその当初に、これからどうこれを体系化していくかということを書いておられるわけだが、結局今までは家庭教育、学校教育、社会教育、それぞれの団子だった。ところがその団子はずして生涯にわたる学習、こういうふうに制度を変えたのだからそれに応じた新たな展開というものがないと、ただ名前が変わっただけで、社会教育イコール生涯教育で、従来とな

んら制度も変わらない。発想も変わらない。ですから、ここで、大胆な一歩前進する提言へとつながったらいいと思う。

塚田委員

行政に対するというか県に対する期待ということで土井会長がすべてお答えを言ってしまったのだが、第3章のところで県の立場ということで事務局からいろいろお話があったけれども、その中で例えば家庭には家庭の守備範囲があるだろうというお話があり、私もまったくそのとおりだと思う。ただし、かつてのような家庭に期待をしていいのかということでは非常に疑問の点があると。そういうことでは家庭の教育力とかそういったものが段々落ちてきているのではないかとということを感じた。だからPTAが、先ほど坂本委員が言ったように学習するPTA。果たして自分たち、親として家庭人として、しっかり子育てなりできるそれだけのものを持っているかどうかということに対して疑問をもってきたことの現われとして、自分たちも学習をしていかなければいけないのだと。もっと言うと、そういうことに気づいた人はまだそんなことをする必要がなくて、気づかない人たちにもっと学習してもらいたいということで、今本当に家庭にかつてのような学習力、教育力を期待していいのかということには、私も自分への反省を含めて疑問の点がある。ただし、建前はやっぱりそうすべきだと思う。ただ、県もどうしても家庭に本当にそこまで期待していいのかどうかという現実はずいぶん見えていて、やはり県にお願いをしないといけないことはどうしても出てくるのかなと。そういうところはやはり建前でなくて現実問題をとらえて、なんらかの取組はお願いしたい。ただ、本来はそれぞれの家庭においても地域においても守備範囲があるので、それぞれその人たちが守っていくのが本来の姿だと思う。

それでは県に一番期待することは何かというと、先ほど来ずっと出ているけれども、どういう地域にどういう人たちがいて、という情報発信をぜひお願いをしたいということ。先ほどインターネットという話もあったけれども、たまたまこの暮れに会社を大掃除していたらこんな本が出てきた。『信州熟年者実践活動事例集』、これは長野県長寿社会開発センターで出したものだが、熟年者の方々が地域でどんなボランティアの活動をしているかということ非常に詳しく書いてあって、例えばこういうようなものも、県としても全県でこういうような活動がありますという発信をしていただく。先ほど小島委員からあったが、そういうものの中で連携をとっていけるような活動があれば企業としても経済的にも効率よく進められるというようなこともあると思うので、そういった情報発信、それはもうインターネットでも結構だし、こういった紙でいくのも結構だけれど、そういった情報発信をしていただく。

それからもう一つは先ほど土井先生が答えを言われたけれど、情報を受け取った側がそれによって活動するとすれば、県の方としてはそれに対していろいろアドバイスができるような、また新たな情報を発信できるようなそういった仕組みづくりもできたらお

願いたい。

松村委員

土井会長が言われたように、家庭教育、学校教育、社会教育と分かれていたのが以前の生涯学習・生涯教育なのだろうと思う。だからやっぱり連携なのだと感じた。小島委員のお話にも子どもたちが集まらない事業をやっているということに関連して、第5章の「学びや活動を推進する関係機関・団体等の役割」の中の学習や活動の参加者を増やすための方策というところがあるが、私たちも指導者養成事業をしてもなかなか長野県から参加していただけない。学習の機会を提供しているけれど参加者が集まらなくて、定員割れを起こしたりしているという現状がある。参加者の学びたい内容と指導者養成の内容との違いがあるのかも知れないが、どうやったら提供している情報をきちんと人に伝えられるのかということところが悩みの一つ。

予算のことも話が出たが、予算がないからこそ、学んだ成果を生かす場が必要なのではないかと。学んだ成果を生かして講師になってみたらいいのではないかと考えている。人に教えるということはやっぱり自分も学ばなくてはいけないので、学んだ方が講師になったらそんなに高価な謝金でなくていいのかなと思っている。

それと、子どものための事業をされるということをお考えだったら、「子どもゆめ基金」で事業助成をしているので紹介したい。全部県のお金でというのはなかなかできないと思うので、それこそ情報発信だと思う。全国でいろんな基金や助成制度があるので、その情報提供が必要なのではないかなと思う。「子どもゆめ基金」では、読書活動も支援しているし、子どもの体験活動に関する事業なら申請したらいいと思う。

前施設で、放課後子ども教室の立ち上げの時から関わった。これは決して先生方の負担を増やすためにできたものではなくて、地域で子どもを育てましょうということなのだが、その際にコーディネーターというものがいなくてはならない。そのコーディネーターは地域の中で子どもたちと関わりをもってくれる人を探さなくてはならない。前施設で3年間実施した1年目は全然見つからなくて、自分たち職員がやったのだけれど、3年目には地域の方や公民館で学んだ方に来ていただくということができた。3年終わって、今は文部科学省と厚生労働省と一緒に組んで放課後子どもプランとなっている。これもやはり「連携」がポイントになる。だから、家庭教育のところでは教育委員会と知事部局の話もあったが、県全体で連携しないとなかなか難しいのではないかと。みんなそれぞれは良いことやっていると思うし、一生懸命やっているのだが、どうしても一つ一つの力ではなかなか発信もできないし、大きなこともできない。連携すれば大きなことができるのではないかと常々思う。そういう意味で県には情報発信していただきたいと思う。

水野委員

ここにちょっと書いてないが、企業なんかはグローバル化が進んでいるが、教育の現場というのはグローバル化があまり進んでいないような気がする。そういう子どもたちに教える、世の中というのはこうだぞ、世界はこうだということを教えるというような人もあまり見受けられない。まあ、英語の先生くらいかなという感じがする。国際協調がこれだけ進んで、経済もひとつになってきているような状況の中では、生涯学習でもやはりグローバル化を進めていくと必要があるのではないかなと思う。

土井会長

続いて、「答申の目次」について検討したい。

< 答申の目次について事務局説明省略 >

土井会長

答申の構成についてご意見をいただきたい。追加したほうがいいのか、これはあまり重視しなくていいとか、この目次の詳しいものは次のページにあるのでお願いしたい。それに先立ち、本日ご欠席の白戸委員からご意見を寄せてくださっているの、その説明を事務局からお願いしたい。

事務局

本日ご欠席の白戸委員からいただいたご意見を簡単にご紹介する。

初めに、「頂いた案はこれまでの議論の整理をしているので、方向性についてはこのままでもいいかと思います。特に、県や市町村による学びの支援ということで、行政は「住民任せにしないできちんと人を育て、配置していかなければならない。」ということとを大事にしていきたい。「この答申を現実的にできるかという視点」からまとめていただきたい。

具体的に1点目。「地域課題を捉えるということ」。15年前に、外国から松本に来ていて結婚している女性を対象にした日本語教室を開設する際に、それが、「国際交流だ、いや地域課題だ」ということで議論をする中で、結局は地域課題と捉えて、公民館で日本語教室を実施するようになった。地域課題を捉える職員や行政の姿勢が求められている。

2点目に、「どのような地域課題があるのか」。松本市で公民館と「福祉ひろば」が連携して活動しているが、かつてはこの福祉をどこがやればいいのかと。行政の縦割りだとか、公民館への先入観があったのではないか。このような先入観に邪魔されず、時代の変化を敏感に感じる取ることが必要であろう。

3点目に、「地域で考えることの意味」。「公民館や生涯学習は古い。NPOでいいじゃないか」という意見もあるが、気のあった人だけで活動できることだけでなく、「地

域の中で違いを克服する努力を」するという意味で、「行政が役割を果たす社会教育・生涯学習の必要性がある。」長野県には、農村女性ネットワークや保健補導員さん方が地域の職員と協力して、学習的手法を使って、暮らしや農業の身近な話題を自分たちで解決していこうというような、公民館と共に地域づくりに成功した事例が数多くある。その中でコーディネーター役としてしっかり密着しながら住民を支えてきた職員がいた。こういうことが地域で考えるということによって重要なのではないか。

4点目で、「都市内分権との関係」について。都市内分権が各地で取り組まれてきているが、身近な地域で合意形成する自治の枠組みが必要になってきているわけで、避けて通れない。その受け皿を地域にきちんと創るという意味で、「社会教育・生涯学習が個の学びにとどまることなく、地域の学びとして、住民のネットワークの学びとして、そして住民の自治を促す学びとして重要」になるのではないか。

最後に、「人の養成～地域に行政職員を育て配置するシステムとしての社会教育・生涯学習」。「地域の課題を掘り起こし、住民と一緒に考える姿勢をもった職員が、社会教育・生涯学習に欠かせないだけでなく、住民協働を重視する行政には必要な人材になってくる。」県内でも生涯学習推進センターや社会教育主事の資格取得等で、研修や経験を積んで、住民と直接接していく、地域をよく知るコーディネーターとして活躍している方がいる。こういう人材が益々重要になってくる。そういう職員を地域に配置しなければならないのではないか。以上。

土井会長

白戸委員のご意見も伺いながら、目次を見ていただいて、発言をお願いしたい。

松村委員

目次を見ていて気になっていたが、第5章(11ページ)のところで、公民館等となっていて、社会教育施設はたくさんあるのになあと思った。12ページでいえば、社会教育機関ではなく社会教育施設等としていただいた方がいいのかなと思う。

そして、15ページのところでは、公民館、図書館、青少年教育施設と3つ書いていただいているのでうれしく思ったが、長野県内は国立・県立の他に市町村立がものすごくたくさんある。ロケーションがいいということもあるけれど、市町村立の青少年教育施設の数と他県が長野県に青少年教育施設をもっている数がものすごく多いので、青少年教育施設の存在を、4章の2の(3)では無理だとすれば、5章の(1)に位置づけていただければうれしいなと思う。

それから、白戸委員からの提案のことは私も最後にお話をしようと思っていたが、人の養成という事は非常に大事だと思う。どんなにいい箱物を造っても、中で働く人いわゆるソフトの面がよくなければ決して施設はいいものにはならない。特に社会教育施設といわれているところはそうだと思う。予算はないということはおわっている

から、ハード面の切り詰めは仕方ないにしても、資質向上から言っても白戸委員が言われるように、社会教育主事の任用資格取得をぜひ必須にさせていただいて、公民館主事の人、長野県内にある青少年教育施設にいる人は、社会教育主事の資格をみんな持っているとなっていたらうれしいなと思う。現状はわかっているけれども、社会教育をやるには地域に出て行くことも大事ですし、自分で企画立案することも大事。嘱託や臨時の職員が多いと書いていらっしゃるが、社会教育施設に勤務する前に任用資格の取得をしていただけたらというのが、ベスト、ベターだと感じているので白戸委員さんの意見に非常に共感した。

土井会長

社会教育主事講習に関してだが、新潟県と長野県は3年に一遍、社会教育主事講習を開いている。平成21年度は7月24日から8月19日まで長野県自治会館を会場として行われる。文科省から生涯教育関係の方々やその道の専門家にも来られる。参加費は4万円。ぜひ関係の方々にご案内いただきたい。

神津委員

目次の組み立ての関係で、要望だが、第2章のところで基本的方向が1と2、二つできている、その下の第3章、第4章、第4章については基本的方向のタイトルが章になっているが、3章につきましては大きい中の、「生涯を通じた～」の2で、「人や地域と関わって学ぶ機会の充実」とあるものだから、これの整理で基本的方向の項目と合わせるなかで、第3章の2が章立てにできるような方向が検討できるかどうか。全体の流れを見たとき、別立てした方が、基本的方向がはっきり位置づけされるのではないのかという気がしたのが1点。

細かい話で恐縮だが、この中の第2章、第4章にある、「学びの成果を人や地域に生かす生涯学習」。この「生かす」の生の字だが、これは当初「活かす」方が使われていたかと思うので、これのご検討もいただければありがたい。

続いて、非常によくできていて、15ページのところ(2)の(1)の、これ公民館の取り組みというところだが、これもできたら、「一人一人の問題をみんなの問題にする」とあるが、もしできたら、検討のなかで「みんなの課題」にしていった方がいいのではないか。

16ページの2行目PTAの関係で、これもこのとおりだが、保護者の学び、親子の参加、父親の参加、OB、おやじの会とあり、この中で間違いではないが、「父親の参加」の表現の仕方について。母子家庭の関係で、広く活字にする場合は注意して慎重にしていかないと。母子家庭の関係の中で父親の絡みがり方によってはおかしくなるものだから、これの取り扱いを慎重にやっていただければありがたい。

塚田委員

5章の企業のところ。我々の守備範囲だけれども、インターンシップについては、広い意味ではキャリア教育に入っていると思うけれども、もし入っているということならそれでいいのだけれども、そのへんいかがか。

事務局

広い意味でインターンシップも、細かく言えば若干違うのかもしれないが、そういうような意味合いであるというふうには考えてはいるが、ただ塚田委員のご指摘をいただいた部分でインターンシップも分けた方がより具体的になるということであれば、それはちょっと検討させていただきたい。

土井会長

15ページ、最後の3番、県及び市町村のところだが、冒頭にも県の方針と市町村教育委員会等とのかかわりについてもご意見があった。そういうことを踏まえながら、(1)の県、(2)の市町村というふうに分けている。各家庭、関係機関との連携、広域的な連携体制の構築という項目があがっているので、今日ご指摘いただいたことも含まれるかと思う。なお、最後の資料のところ、具体的な実践事例も紹介するというので、かなり具体的なものになるのかと思う。神津委員からご指摘いただいた文言等についても事務局でご検討をお願いしたい。

おかげさまで貴重なご意見をたくさんいただくことができた。

以上で本日の議事を終了させていただく。